

視しつつ、辺境の地＝魔女の巢窟であるバスク地方の人々を裁いたことになる。『墮天使』の中で描写されている魔女のサバトの光景では「聖体奉挙」が度々言及される。黒色の聖体を冒瀆し悪魔崇拜を行うという魔女の行為は、聖体を崇め、神を崇拜するバロックの宗教的特色の明白な転倒である。また論文名中の「無節操」は、悪魔の無節操＝移り気を意味しており、これもバロックの特色である。また一六一三年に再版された『墮天使』にはヤン・ジアルンコ作の魔女のサバトの版画が挿入されている。ポーランド出身のジアルンコはパリで長く制作活動をした画家であり、バロック美術を享受していたことは間違いない。流動感・技巧・装飾・綺想・グロテスクといったバロック美術の諸特徴が、ジアルンコの版画にも見て取ることができる。バロックというヨーロッパの一大思潮は魔女狩りと深く関係しているのである。

『魔女への鉄槌』に見る悪魔像の構成

野村 仁子

魔女裁判において、魔女と悪魔との契約という概念は大きな役割を果たした。というのも、魔女が悪事を成したという証拠や証言がなくとも、悪魔と契約したという証拠(例えばアザやほくろなどがそうだとされた)さえあれば、魔女として裁くことができたからである。では、魔女と契約を結んだ悪魔とは一体どのような存在であったのだろうか。本発表では、魔女裁判という狂乱の元凶だとされてきた『魔女への鉄槌』(*Malleus maleficarum*, 1487)において悪魔がどのように定義されているのかを考察する。

るのかを考察する。

まず、キリスト教教義の根幹を成す、旧・新約聖書において悪魔がどのように描かれているのか概観する。旧約聖書において、悪魔は神の使いとしてや、異教の神々として描かれている。新約聖書においては、悪魔は天から落ちた者であり、悪事を行う者として描かれている。しかし、魔女裁判期のような恐怖そのものというイメージはあまり見受けられない。

次に『鉄槌』第一部において見出すことができる三つの悪魔観、①聖書などの伝統に基づいた悪魔観、②『鉄槌』において独自の悪魔観、③異教の神や民間信仰における悪魔観についてそれぞれ考察する。

①聖書などの伝統に基づいた悪魔観

『ヨブ記』など引用をもとに、悪魔は地上で悪事を行い、それは神のうちにあることを証明している。また、トマス・アクイナスからの引用でもって、悪魔は天から落ちた墮天使であることや、人間にはない力を備えていることが確認されている。

②独自の悪魔観

『鉄槌』では、悪魔の罪は魔女の罪より重いということが述べられている。これは、『鉄槌』の著者たちが新たに考え出した悪魔観であり、この著作が、魔女の処刑を目的に書かれたため故のものであると考えられる。

③異教の神や民間信仰における悪魔観

墮天使である悪魔に関する記述以上に、インクブスやスクブスといった悪魔や、悪魔が姿を変えたものとされていた異教の神々についての記述が多く見られる。これは、アウグスティ

ヌスやトマス・アクイナスも言及しているものであるが、この作品では、この両者からの引用でもってこの種の悪魔の存在や行う悪事を現実のものであると断定している。

ここでは、キリスト教の浸透と共に異教の神々が悪魔と混同ないし融合していったことがうかがえる。

以上のように、『鉄槌』では、キリスト教の伝統に基づきながらも、新しい悪魔観も提示している。また、キリスト教が浸透したと考えられていた一五世紀のヨーロッパにおいて、依然として古来より続く民間信仰や異教の神々への信仰が残存していたということが『鉄槌』を通して見えてくるのではないだろうか。そして、それらの神々は聖職者によって悪魔に姿を変えられ、魔女と結びつけられた。

市民宗教再考

—— 一九世紀フランスの思想家たちに即して ——

伊達 聖伸

「市民宗教」という言葉は奇妙な運命をたどってきた。新しい政治秩序を支えるのはいかなる宗教であるべきか。ルソーが『社会契約論』で提起したこの問いは、一九世紀フランスにおいて本質的な問いであり続けた。ところが、当時の著者たちは「市民宗教」という言葉をほとんど用いていない。それでもこの言葉は、近代の宗教的側面を記述するための操作概念として、研究者の共通理解ができていないまま、現在でも用いられている。

本発表では、コント、トクヴィル、デュルケムという、フラ

ンス一九世紀の三人の「社会学者」に注目し、彼らの宗教論をルソーの市民宗教と比較検討する。

ルソーの市民宗教は第一に、反カトリック的である。ルソーが「司祭の宗教」を批判するとき念頭に浮かべているのは「ローマのキリスト教」で、これは人びとに「二つの法体系、二つの首長、二つの祖国」を与え、「社会的統一性」を破壊する。第二の特徴は、内的な信仰と外的な礼拝のあいだに分裂ないし齟齬を認める点である。第三に、ルソーは政治と宗教の一致を目指している。第四の特徴は、寛容の逆説にかかわる。ルソー自身は、不寛容な「市民の宗教」と寛容な「市民宗教」を区別しようとしたが、主権者は市民宗教の信仰箇条を信じない者は誰であつても国家から追放することができるとされており、市民宗教のイメージは、ルソー自身が批判した排他的な国家宗教のイメージに連なりうる。

コントの人類教は、ルソーの市民宗教の一変種であるという見方がある。しかし、コントとルソーでは、一元性と二元性の配分がほとんど正反対である。たしかにコントは、人間の存在を個人的側面から扱ったり集団的側面から扱ったりすることはあるが、人類教が想定しているのは調和であつて、ルソーのように公と私のあいだに断絶を見ていない。ルソーの市民宗教は、政治と宗教を一致させようとする点において一元的だが、コントはまさにこの一致こそ弊害をもたらすものだとし、世俗的権力と精神的権力の分離を説く。

トクヴィルがルソーを熟読していたことは知られているが、ルソーが政治と宗教の合一を唱えるのに対し、トクヴィルは両